

「全裸症」服やアクセサリーと認識できるもの全てを身につけることができなくなる病気。治療法は基本的にない。

「痒い！痒い痒い痒い！」

四月から高校三年生になる佐宮優衣はベッドの上で悶えた。とある春の日、夜も二時を回ったころ、スマホをいじりながらゴロゴロしてそろそろ寝ようかとしていたところ、急に全身を走る鋭い痒みに襲われた。

「無理無理！痒い！痒すぎ！！」

ベッドから飛び起きた優衣は脱ぐ。パジャマ、下着、靴下と着ていた全てのものを脱ぎ捨てた。慌てて姿見に映った自分を確認する。腕も胸もお腹も背中もお尻も脚も爪先までもが真っ赤になっていた。衣服が当たっていた部分全てが熱を帯びジンジンとした痒みに襲われていた。

「最悪！ヤバい！」

ほとんどパニックになりながら別室の母に「NE」する。優衣は二階の自室から一階のリビングに降りた。同じく二階の両親の寝室からリビングに降りてきたパジャマ姿の母に全身を見せる。

「真っ赤じゃない！大変！どうしよう！ダニでもいたのかしら！？」

母も動揺した様子だ。

「どうしょ！痒いだけなんだけど、薬とかある？塗ったほうがいいよね？」

「うーん…とりあえず痒み止め持ってくるわね」

持ってきてもらった痒み止めを塗り、少しの間母親と話していた優衣は段々と落ち着きを取り戻し、全身の痒みもおさまってきた。

「薬塗ったし、少し落ち着いたから痒みもおさまってきたっばい」

「あらそう？確かに体の赤みも薄れてきたみたいねえ。もう大丈夫そう？」

痒みがおさまってくると優衣は落ち着いて状況を整理できるようになってきた。すると、リビングで優衣だけが裸で立っていて、パジャマを着た母親に赤らんだ自らの裸体をまじまじと観察されているという異常事態が発生していることに気づく。

「ごめんお母さん！とりあえずもう大丈夫そうだから服着てくるね！」

「え！？大丈夫なの？心配なら救急で診てもらってもいいんじゃない？」

現在の状況にかなりの恥じらいを覚えた優衣は戸惑う母との会話を半ば強制的に切り上げ服を着るために二階の自室に上がった。

「ダニなのかなあ。流行ってるって聞くしなあ。パジャマもシーツも全部違うのに替えなきゃかな。」

自室に戻ると優衣は痒みの原因がダニである可能性を考え、先ほどまで着ていた服ではなく、クローゼットにあったスウェット、下着、靴下を取り出した。そしてまずはシーツを履こうとそれを足首に通し、上に引き上げた。すると

「痒い！痒い痒い！！何これ！無理！着られない！」

シーツと肌が触れ合った部分、足首から脛の外側を通って膝の皿辺りまでの部分が赤くなって鋭い痒みに襲われていた。

「え？どういうこと！？ダニってこんなことになる？」

優衣の部屋から大きな声が聞こえ、心配した母親が部屋に駆けつけた。

「どうしたの！？何かあった？…って脛が真っ赤じゃない！おさまったんじゃないの？！」

「わかんない…でも、服着ようとしたら擦れたところがすごく痒くなっちゃって…」

「これダニとかじゃないわよ。なにかのアレルギーとかじゃない？」

「そうなのかな…」

戸惑う優衣と母親。すると母親がふと何かを思い出したかのように提案する。

「…優衣、あの、すごく辛いと思うんだけどさ、もう一回服を着てみてくれない？できれば上も下も全部。」

「え！？なんで？」

「お母さんちょっと心当たりがあるの。ちょっとそれを確かめてみたくて。だからお願い、もう一度服を着てみてくれない？」

「う、うん…わかったよ。頑張ってみるけど…」

優衣は母親に従って下着、スウェット、靴下をがむしゃらに身につけた。もちろんんでもない痒みが全身を襲う。

「痒い！痒い！！もういい？ねえ！もう無理！ああああ！」

「ごめんね！もう大丈夫！脱ぐの手伝うから！」

母親に手伝ってもらいながら優衣はまた一糸纏わぬ姿に戻った。また全身真っ赤になった裸の優衣とパジャマを着た母親の図が出来上がっていた。

「なんとか服着たよ！もう脱いだけどー！それで？お母さんは私に何をしたかったの？何を確かめられたの？」

優衣は母親の提案のせいで引き起こされた再度の全身の鋭い痒みにイライラを隠せなかった。

「優衣、ごめんね。でも、お母さん多分分かったかもしれない。」

「なにが！？」

「優衣のその痒みの原因よ。」

「…え？」

母親はゆっくりと優衣を落着かせるように話し出した。

「あのね優衣、<sup>㊦</sup>全裸症<sup>㊦</sup>って知ってるかしら？」

「<sup>㊦</sup>全裸症<sup>㊦</sup>？なにそんなの知らない。露出狂みたいなこと？」

「いや、露出狂とは全然違うわ。<sup>㊦</sup>全裸症<sup>㊦</sup>っていうのはね、端的に言えば、衣服や装飾品として認識できるもの全てを身につけることができなくなってしまう病気なの。露出狂は自分の意思で服を着られるでしょう。でも全裸症になってしまうとどうしたって服を着られなくなるのよ。」

優衣は母親の言っていることがよくわからなかった。

「え？待って。じゃあお母さんは私がその<sup>㊦</sup>全裸症<sup>㊦</sup>だって思ってるわけ？」

「…そつよ。」

「なんで！？ダニとか、なんか繊維とかのアレルギーかもしれないじゃん！」

「でもね、優衣。今あなたが座っているのはベッドよね。多分そのベッドに敷いてあるシーツの素材とパジャマや下着の素材はそんなに変わらないはずよ。それなのにどうして優衣は今平然と座っているのかしら。」

「あ、…え」

優衣は何かとてつもなく恐ろしいことに巻き込まれたように感じて、声が喉の奥につつかえて出てこなかった。

「それにね、もしダニが原因だとしても、全身が真っ赤になるような状況のベッドに普通に座っていられるのってやっぱりおかしいと思うの。」

「い、いや…でも」

「それともう一つ。下に敷いてあるラグの上に優衣は足を置いているけど、足の裏はどう？痒くなっているかしら？」

「…か、痒くないけど…」

「そう。じゃあ何かの繊維にアレルギー反応が出てるって感じでもなさそうよね。」

「……」

「それじゃあ優衣、姿見を見てみなさい。」

母親に促され優衣は姿見の前に生まれたままの姿で立った。

「どう、優衣。今話している間に痒みも赤みもほとんどおさまっているわね？ベッドに触れていた手やお尻や太もも、ラグにつけていた足の裏に痒みも赤みも出てないわね？」

「…うん。赤くなっていないし痒みもほとんどおさまってる…」

優衣は姿見の前で全裸の自分と対峙していた。黒髪のショートボブに映える白くきめ細やかな肌。大きな瞳に小さくも通った鼻、薄めの唇に口角は少し上がっていて、首は長かった。それに陸上部で鍛えられた引き締まった体で歩く優衣の姿は、学校でも性別を問わず憧れの眼差しをこれでもかと浴びるものであった。

「優衣、今言うことじゃないかもしれないけど、あなた綺麗な体してるわよね。」

「ねえ！ほんとに今言うことじゃないんですけど！」

「ごめん。でも本当に綺麗だったから言いたくちゃって笑」

「やめてよ…恥ずかしいから…」

恥ずかしがる優衣に対して追い討ちをかけるように母親は話を続けた。

「それでね、本題なんだけど。なんでお母さんが全裸症<sup>フル・ヌード・シンドローム</sup>について知っていたかってことなんだけど。」

「うん。知りたい。」

「実はね、お母さんのおばあちゃん、つまり優衣のひいおばあちゃんの親戚の話なんだけど…」

「ひいおばあちゃんの親戚？」

「そう。ひいおばあちゃんの従姉にあたる子がね、ある日突然全身に強い痒みを感じてその日以來服を着ることが一切できなくなったらしいの。それでね、今日の優衣とお母さんみたいに虫に咬まれたとか布が肌に合っていないとか考えたらしいんだけど、虫もわいていないし布団で寝ても痒くならなかったらしいの。もちろん色々医者さんにも診てもらったのだけど、服を着ることだけができないっていう原因はわからないしもう手の施しようがないってなったらしいの。」

「え？じゃあその従姉の人はずっと裸だったってこと？」

「そうね。でもその従姉の人は当時もうお嫁に入ってしまったっていて、あまり家を出る必要もなかったから毎日服を着ようとしては痒みに襲われるのを繰り返しながら、治療法が見つかるまでほとんど外出しない生活を送ったらしいのよ。」

「え？ずっと家から出られなかったんだ…」

「そうなんだけどね、その人が服を着れなくなってちょうど一年経った頃、その日もどうせ無理だろうって思いながら服を着てみると、普通に着られるようになっていたらしいの。」

「一年…」